

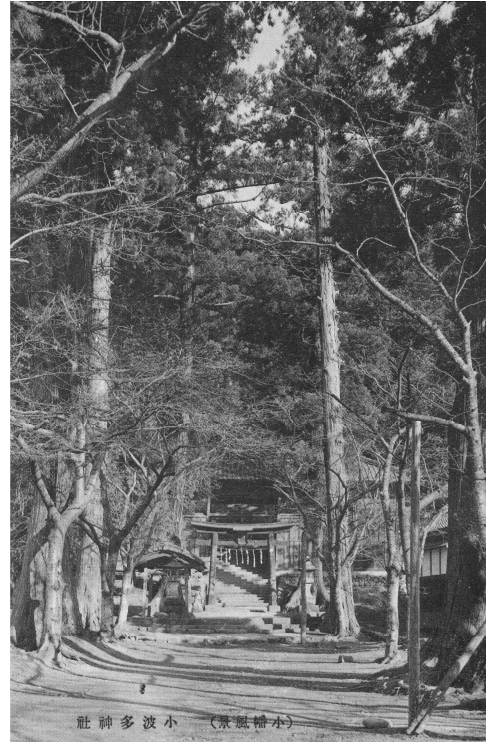
## 2 小幡八幡宮例大祭に見る歴史的風致

### (1) はじめに

町内における歴史と伝統を反映した活動として、藩政時代より続く「小幡八幡宮例大祭」がある。拝殿前の由緒書によると、その起源は正保年間(1644～1648)に遡り、同2年(1645)、織田家3代藩主信昌のぶまさが小幡藩の守護神として「小幡八幡宮」を勧進したおりに、藩士によって始められたものであるといわれている。

例大祭は、5年に一度行われ、江戸時代に制作されたと思われる(※1)上町・横町・中町・下町の各屋台(いずれも町指定重要有形民俗文化財)と、35年前に制作された新堀町の屋台の計5台と、神楽獅子舞(町指定重要無形民俗文化財)が町内を練り歩く。

参道の両側は、今は桜が植えられているが、戦前は根廻り2mを超える杉の木立ちで覆われ、荘厳な雰囲気にも包まれた神社であった。



■小波多神社

(小幡風景絵はがきより:昭和14年撮影)

### (2) 町屋地区に見る歴史的建造物

#### ① 小幡八幡宮拝殿

小幡八幡宮(小波多神社)の拝殿は、幕末期の建物である。正保2年(1645)織田信雄のぶの子、信良のぶよしが小幡陣屋の鬼門(北東=ウシとトラの間の方角のことで、鬼が出入りする方角であるとして、万事に忌むべき方角とされている)封じとして造営計画を立て、3代信昌の時代に領内の高田村(現富岡市妙義町)から御神体、本殿ともに移し祀られたと、拝殿横に建つ石碑「村社小波多神社由緒記(昭和9年10月建)」に刻まれており、当時から存在していたといえる。

※1: 江戸時代の文化期(1804～1818)以降補修の記録が無い場合、文化期以前に制作されたと思われる。

拝殿の天井には天井画（町指定重要文化財）があり、中央大枠内には竜が画かれ「法橋探雲行年 72 歳筆」の署名と落款がある。四周外側 36 の小枠に藤原公任撰による「三十六歌仙」の肖像画に歌及び名が記されている。その他 54 の小枠には、花鳥・人物・動物類が画かれている。小枠の画はすべて中央の竜に向かい竜は本殿に向かっている。

画者の探雲（享保 9 年～文化 9 年、1724～1812）は、江戸時代中期の人で、江戸に出て狩野探信かのうたんしんに就いて学び、花鳥画を得意としていた。



■小幡八幡宮



■拝殿内の天井画

## ② 下町組合事務所

明治 39 年（1906）の建造物であり、かつては隣接する富岡市額部地区ぬかべにあったものを、昭和初期の木材が貴重であった時代に小幡下町組合が譲り受け移築したもので、雄川堰と桜並木街道最北端の町屋地区玄関口に位置し、漆喰塗り、蔵造りの建造物として小幡のまちなみに溶け込み、良好な景観を生み出している。



■下町組合事務所

この組合事務所は、地域共同の養蚕道具の収蔵庫などとしても利用されてきたが、現在は町屋地区を舞台に行われる小幡八幡宮例大祭の屋台（山車）収蔵庫のほか、お囃子はやし、笛（横笛）、神楽獅子舞の稽古場所として利用されており、春と秋には心地よい音色が集落に響き渡っている。

### ③ 旧甘楽社小幡組倉庫

この建物は、煉瓦造り・間口 10 間・奥行 4 間・建前 20 尺・2 階建てで、「有限責任信用販売購買利用組合甘楽社小幡組沿革史（昭和 3 年）」によると、大正 15 年（1926）5 月に農業倉庫として竣工されたとある。



■旧甘楽社小幡組倉庫

戦時下の昭和 18 年（1943）に工場は閉鎖し、小幡町農業会に移管され、農産物・肥料等の倉庫となった。次いで昭和 23 年（1948）には甘楽町農業協同組合が引き継いだ。

昭和 59 年（1984）2 月、甘楽町はこの倉庫を買い受け、翌 60 年（1985）4 月、文化庁の指導により、まちなみ保存の一環として、資料館に転用のうえ保存した。

## （3）小幡八幡宮例大祭

### ① 養蚕農家と例大祭

「小幡八幡宮例大祭」は小幡城下のなかでも養蚕農家群が遺存する町屋地区を中心に開催される。明治の中期までは、年 1 回の春蚕だけであった養蚕業が、蚕種の貯蔵方法の確立などにより、夏秋蚕が普及したことで、町屋地区の養蚕農家である氏子は小幡八幡宮を養蚕の神としても信仰するようになり、祭りとともに現在に至っている。



■町屋地区の養蚕農家群

### ② 5 年に一度の例大祭

祭りは 5 年に一度、養蚕の終わった秋も深まりつつある 10 月半ばに開催される。これは昭和 34 年（1959）2 月、現在の甘楽町が発足したときに、氏子総代や各町内の若衆頭わけえしの人たちによって 5 年に一度と取り決められたものである。

祭礼の華となる神事は、下町・中町・上町・横町・新堀町の各町内で所有する 5 つの屋台の「城下巡行」と、屋台を有さない大下町による「神楽獅子舞」である。5 つの屋台の前方には、各町内が用意した人形が飾られ、五穀豊穡や家内安全を祈願して

いる。後方には、お囃子が座り演奏で祭りを盛り上げる。



■屋台前方の人形と後方のお囃子（中町）

### ③ 若衆組と例大祭

祭りの神事の一切は、神社と祭礼に奉仕する各町内の「若衆組」<sup>わけえしくみ</sup>によって執り行われている。「若衆組」は、祭りを維持するために藩政時代から継承されている伝統的な組織であり、地元の子供たちにお囃子などの神事を稽古し、小幡を舞台に今なお活動を続けている。そして、5年に一度の祭礼を維持するために、各町内では、この「若衆組」が中心となり、毎年欠かさず春も浅い



■若衆によるお囃子の稽古

3月ごろから下町組合事務所や町会の集会所などでお囃子、笛（横笛）、神楽獅子舞の稽古が始まり、昔から変わらぬ笛の音色が、養蚕農家群の集落に響き渡る。

### ④ 賑わう例大祭

#### 【例大祭1日目】

住民が総出で早朝から注連縄<sup>しめなわ</sup>を張り巡らす等の祭礼準備にいそしみ、日ごろ静かな小幡のまちは賑々しいハレ舞台となる。

午後になると、各町内からはお囃子の音色が鳴り響き、屋台は地元町内を巡行し、祭の始まりを告げる。

夕方、提灯に灯りがともるころ、各町内の5つの屋台が一斉に八幡宮に向かいまちなかを練り歩く。幟旗の立つ小幡八幡宮入口に5つの屋台が集まると、「神楽町」とも呼ばれる大下町による「神楽獅子舞」が「神楽唄」とともに奉納される。

巡行のお囃子は、藩政期における旋律とリズムを引き継いでおり、その原形は庶民に身近な存在である獅子舞の音楽が転用され、変化を重ねて現在のお囃子に至った。



■ 神楽獅子舞と屋台の競演



#### 【例大祭2日目】

例大祭2日目は、朝から各町内で屋台の巡行が行われ、例大祭の最後を盛り上げる。お囃子の音色が終わりを惜しむかのように響き渡る。夕方からは千秋楽（慰労会）が開かれ、各町内で祭礼を執りしきる若衆組わけえしぐみが中心となり、5年後の開催を祈念して全日程が終了する。

#### ⑤ 巡行ルート

「城下巡行」のルートは、上町・横町・中町・大下町が「旧甘楽社小幡組倉庫」広場で、「神楽獅子舞」と「神楽唄」を奉納する。これは、江戸期にはなかったことであるが、昭和34年に屋台の休憩が必要であることや「養蚕」の倍盛を願って始まっ



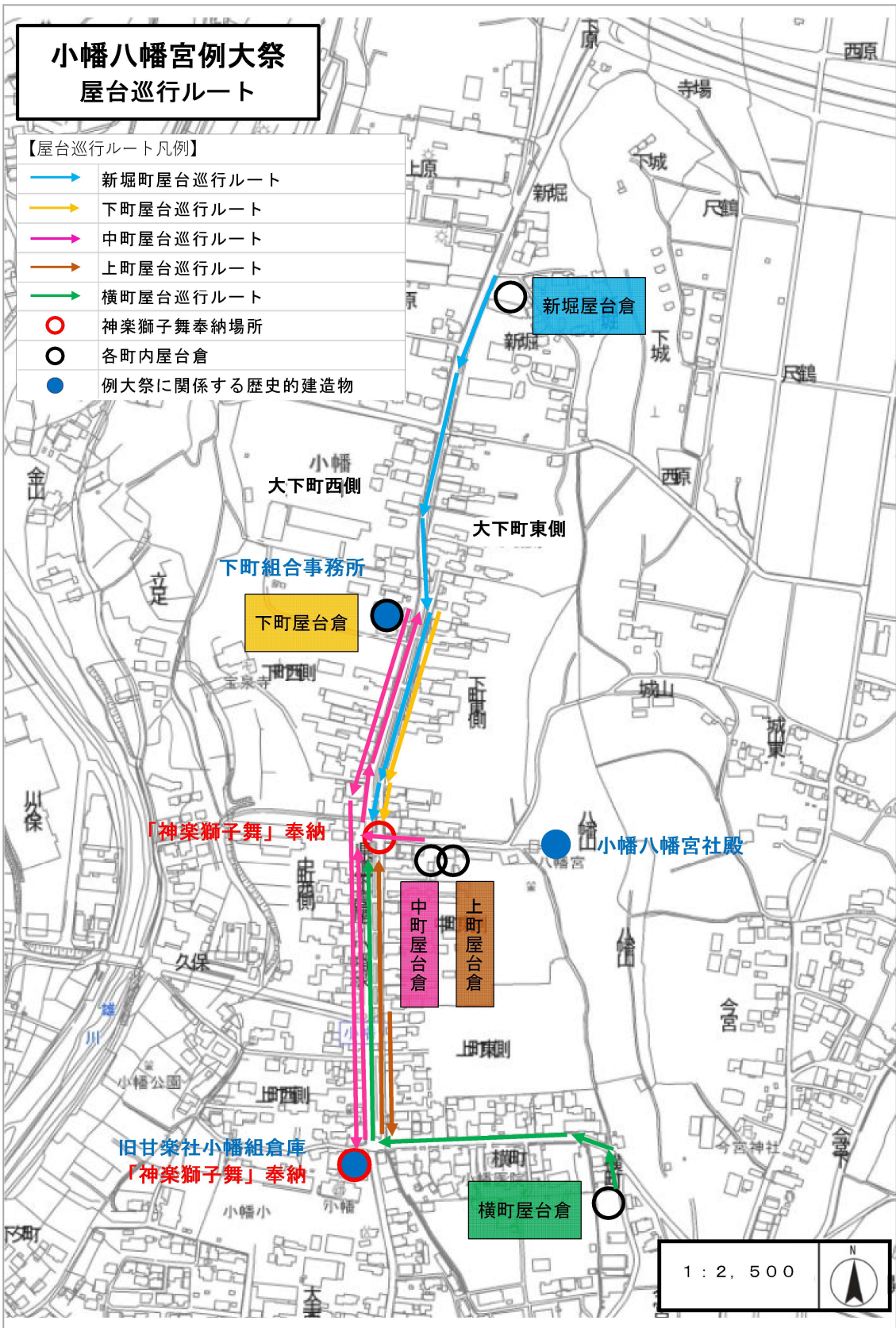
■ 町屋地区を巡行する下町の屋台

たものである。その後、雄川堰に沿って桜並木を北上し、小幡八幡宮へ至る。

一方、新堀町と下町は、小幡の主要通りであり歴史的な建造物である養蚕農家群と雄川堰に挟まれた下町筋を南下し、小幡八幡宮を目指す。

【例大祭1日目のタイムテーブル】

13:00	各町内でお祭り 地元（町内）を巡行	
14:00 ~16:00	町屋地区巡行 ○新堀町（新堀町→大下町→下町→中町→小幡八幡宮） ○下町（下町→中町→小幡八幡宮） ○中町（中町→下町→上町→旧甘楽社小幡組倉庫→上町→中町→小幡八幡宮） ○上町（上町→旧甘楽社小幡組倉庫→上町→中町→小幡八幡宮） ○横町（横町→旧甘楽社小幡組倉庫→上町→中町→小幡八幡宮）	
※16:00各町内から小幡八幡宮に集合		
16:00	神 楽	（大下町）
16:15	祭囃子	（全町一斉）
16:25	祭囃子	（横町→下町→中町→新堀町→上町）
17:20	神 楽	（大下町）
17:35	祭囃子	（横町→下町→中町→新堀町→上町）



#### (4) まとめ

小幡陣屋の鬼門封じとしての役を果たしてきた小幡八幡宮。

正保2年(1645)、織田家3代藩主信昌が小幡藩の守護神として「小幡八幡宮」を勧進したおりに、藩士によって始められた例大祭。氏子からは、同時に養蚕の神としても信仰されてきた。養蚕農家で形成されていた氏子も現在は様変わりをし、この地域全体の住民が氏子となり風致の範囲に広がりを見せ、地域全体で例大祭やお囃子の稽古が継承されている。

藩政時代から受け継がれてきた例大祭と、様々な所作が小幡八幡宮の氏子同士の心をつなぎ、この地区の活気ある人々の営みと養蚕により繁栄した古きまちなみの歴史的風致を形成している。



■屋台倉を出発する中町の屋台



